

# 生きる権利を求めて

## ①壁にむかってにらめこしていました 寿識字学校からの報告

大沢敏郎

### 一——識字とは

識字とは、文字通り「字を識る」ということで、文字を読んだり書いたりできない人が、それができるようになることであり、自分のものでなかった文字を、一文字、一文字、自分のものとするものである。さまざまな理由で、文字の読み書きができないまま成人した人たちが、身をきりぎりすような想いのなかから、文字を自分のものとするたかいたかに向かっていく勉強が識字である。今日、日常生活のなかで文字や数字をつかわない生活など、ほとんど考えられないという一

事としてみれば、おのずと明らかかなように、文字の読み書きができなかったがために、その人たちがなめてきた苦々しさや悔しさや哀しさには計り知れないものがあると思う。

文字の読み書きをできなくさせられたさまざまな理由とは、ひとつの時代の反映であったり、家・家族の犠牲であったり、ときの「学校」からの排除であったりする。文字を識りうる機会にある年端もいかな子どもたちが、それらの錯綜したさまざまな理由によって、その機会を逸してしまったということは、その子どもにも責任があるのではなく、そのよう

な子どもをうみだした状況そのものに大きな責任があると思う。特にそのなかで「学校」の責任が、いかんともしがたく浮かびあがってくる。文字を識りうる機会の最初のとき、つまり、小学校入学時のほんのわずかの八時Vをのがすことによって、以後、その子どもの生きていくうえで無限の可能性が、文字の読み書きができないがために限定されてしまうとしたら、なんとも無念でそれおそろしいこと思われてならない。

さらに深くいえば、文字の読み書きができないということは、ものの見方や考え方という意識の世界をもズタズタにき

- 一——識字とは
- 二——ドヤ街のなかでの識字学校
- 三——文字を自分のものとする
- 四——識字の勉強をすること
- 五——おわりに

りけずり一人の人間の生きていく「場合」そのものをも強く決定してしまうということである。つまり、現象としての文字の読み書きができるのかできないのかという問題ではなく、一人の人間の生そのものを、生きかたそのものを決定してしまうということである。

ここで、簡単に、ぼく自身の識字に対しての根本的な考え方、姿勢のようなものを述べておきたい。

文字の読み書きができないということ、は、一人の人間の生きかたそのものに深く関わることであるから、ただ単に文字をおぼえれば（大切なことであるが）そ

①壁にむかってにらめこしていました  
②在日韓国・朝鮮人／その民族と人権

れでよいということにはならない。文字をおぼえ、こんどは、その習いおぼえた文字をつかって、自分の生きてきたことの意味を、とらえかえし、洗いなおしていく作業をしなければならぬと考えている。文字の読み書きができなかったがために、そう生きざるをえなかった自分自身を、こんどは文字をつかって視つめ

なおしていく自己検証の作業である。自分自身のつまずきの生の道すじをあきらかにすることであるから、とてつもなく苦しく、そして、辛い作業だと思ふ。どんなに苦しくどんなに辛いことであつても、これから堂々と前をむいて、きちんと生きていくためには、このことをしなければならぬ。

この作業ができたととき、初めて、ほんとうに文字を自分のものとすることができるのではないだろうか。

この識字の根本的なところを視すえながら、一人ひとりの苦しく辛い作業の手助けをする存在として、ほくは、識字に出席し、ぼく自身にとっての識字を勉強している。

もうひとつ重要なこととして、寿の識字においては、まったく便宜的なためにだけ、教える側(先生役)、教えられる側があるだけだ。つまり、おたがいが、学びかつ教えあうという厳しい関係性のないなかで識字がおこなわれているというこ

とである。つきつめていえば、一方的な教えるとか教えてやるという関係性なのかでは、寿の識字は成り立たないということであろう。

だから、出席した全員が勉強し、一人ひとりが、その日の識字で学んだ何かを自分のものとしてもってかえるということである。

そして、このような関係性のなかで、識字に出席して勉強するのかもしれないのかも、その人の意志のみにかかる、まったく自主的なのものであるということも付け加えておきたい。

## 二——ドヤ街のなかでの識字学校

横浜市中区寿町の簡易宿泊所街(ドヤ街)で識字学校が始まって、この八月で約二年八カ月がたったことになる。最初は、ドヤの一室に有志があつたつて寿寺子屋としてスタートし、その後、マンションの一部屋に移り、そして、今は、今年の三月十日に再開された横浜市生涯生活館の四階の会議室をつかって、毎週金曜日の夕方六時から約三時間、識字学校がひらかれている。

△学校△などという名称がついているが、公的なものとのつながりは一切ない。このような識字学校なるものが放置されていること自体がそもそも社会的な

問題であるが、前にも述べた出席している人たちが全員強い△自主△性にささえられて△幻のごとく△寿町のなかに深く根をおろしつつ△実在△しているのである。

社会から切れ、地縁・血縁から遠く離れ、教育から放りだされた人たちの住む(約四千五百人の日雇労働者がいる)この寿町でこそ、今、識字は、生活を維持していくということのつぎに大切なことではないかと思つている。そうであるにもかかわらず寄せ場という地域性を考えるならば、識字などというささやかで地道な営みは、その地域性という大波に、かんたんに呑みこまれ消えさつていって、も何の不思議なこともないように思われる。

しかし、何度もその大波に呑みこまれそうになりながらも、とにかく、二年八カ月におよび歳月をつみかさねてくることのできたのは、初期寺子屋のときから支え守りつづけてきた有志の人たちの識字に向かう粘りづよいちからがあつたからだ。その人たちがいなければ、今日の識字学校もありえなかつたのではないかと思う。そして、その人たちは、今も識字学校の先頭にたち、めざましい△お手本△をしめしつづけてくれている。

現在、毎週の識字の時間に部屋にいる人数は、二〇人前後になっている。もち

ろん出席者は流動的であるが、年齢は、八〇歳代から二〇歳代までと非常にはばがひろい。また出席者の一人ひとりについでみると、識字の根本の問題であることからの自分の生きかたをきちんと視つめていくということに触れてくるのであるが、文字の読み書きができる人もできない人も何ら△区分△することなく、同じ部屋、同じ時間のなかで勉強をしている。それぞれの人の生きてきた道すじをともに学ぶという意味において、今の識字のこのかたちをくずそうとは思われない。

混然としたこの識字の部屋の様子も、ある面から言えば、寄せ場という地域性と合致しているようにも思われる。寿地域の住民のために開放されている寿のセンターである生活館をつかってやっているのだから、通りすがりにしろなんにしろ、いろいろな人が顔をみせるのはあたりまえのことであろう。

そして、このいろいろな人が顔をみせるということが寿の識字にとっては重要なこととなっている。というのは、初めから「文字の読み書きができないから教えてください」などと言って部屋に入ってくる人など、もちろん一人もいない。識字をやっている部屋の前まで来ることが、まず、たいへんなわけである。さらに、部屋の中まで入ってくることなど、

もつと、もつと、たいへんなことで、その入り方のスタイルは千差万別である。アルコールがはいっていたり、どなりちらしたり、文字の読み書きができないことなどお・く・びにもださないすがたで部屋の中へ入ってくるのである。

だから、文字の読み書きができない人が、部屋の中へ入り、椅子にすわり、鉛筆をもつまでの八決意・決断には想像を絶するものがある。どんなスタイルで部屋の中へ入ってこようと、その八決意・決断を、そうかんたんに踏みに行けることは許されないことだと思ふ。まさか、入ってくる人、一人ひとりに、文字の読み書きができるのかどうかをきくことはできない。

それゆえ、いろいろな人が顔をみせるということは重要なことで、その顔をみせるたくさんの人のなかの一人でも、ほんとうに文字の読みかきができるようになりたいという人がいれば、寿の識字学校の意義は十分にあるのではないだろうか。

また、いろいろな人が顔をみせ椅子にすわっていくということは、寿に住んでいる日雇労働者の一人ひとりが、どんなかたちであれ勉強をしたがっているのではないかと思えてならない。

このように考えてくると、文字の読み書きができない人は、もちろんのこと、

寿に住んでいるその他の人たちの、教育すなわち学校教育のなかでうけてきた傷はいやしがたいほどに深いものがある。

### 三——文字を自分のものとする こと

ぼくが、寿の識字に出かけ勉強するようになって、まだ一年あまりしかたっていない。しかし、この約一年間で、ぼくは、文字で書きあらわすことのできないほどの多くのことを、識字にきている人たちから学び教えてもらったと思つてゐる。それは、人間のすばらしさ、やさしさであり、そして何よりも文字を書くこと、文字を自分のものとすることに對する底深い感動であつたと思ふ。ぼくに感動するちからをつけてくれ、ぼくの日常生活においていろいろな物事を視る目をやしなってくれたのも、識字にきている一人ひとりの人たちであつた。

Aさん(五六歳)は、識字に出席するよう何回も人にすすめられ、やっと初めて識字の部屋に顔を出したときに言ったことは、きょうは頭が痛いからこのつぎから出席するということであつた。残念とは思ひながら、ぼくは、自分の部屋でやってもらうように、五〇音をアタマにして言葉をつくるプリント(教材)を渡し説明をすると、これならできると言っ

て部屋にはいり、五〇音をひとつひとつ拾いながら言葉を完成していった人である。

それから約六カ月、根気よくさまざまなプリントで文字を書く練習をしていたAさんに、アタマの言葉を提示して短文をつくるプリントを出したところ(横に先生役の人がついて、つぎの文章を書きあげてくれた(傍点部分の言葉を提示))。

○はるは、はるでも、はださむい日があります。

○じぶんのかおは、いくら、ていれしてもきれいじょう、よくなりません。

○むかしわたくしは、ちいさい、ときはがきだいじょう、でした。

○ちは、わたしが、にさいのときになくなつたと、ははから、ききました。

○ははは八十六さいで、なくなり、わたくしは、なくなる、まえ、七年かん、めんどうをみました。

○いのちほど、たいせつな、ものは、ありません。

○ゆめばかり、みても、なかなか、じつこう、できません。

○こころの、なかは、いつも、まよいばかりです。

約一時間ほどかけて書きおえたあと、見せてもらいながら人ははははのところが

気になり話をきくと、Aさんは、まだまだ、おかあさんのことについて、たくさん言いたいことがあるように感じられ、つぎの識字の時間に、ぼく自身としてはせいぜい用紙一枚くらいに何か書いてもらえればと思ひ、つぎの題をつけて用紙を渡した(下ヤ街のなかでの識字ということ、参考となる資料がないため、教材にしても、何か文章を書くにしても、一人ひとり異なつた教材、異なつた文章の題をさし出すことによつて、その人だけの生育史・生活史を書いて語つてもらっている)。

八六歳でなくなつたおかあさんのことを書いてください。七年間めんどうをみたときのことや、今も心にこつていることなど、おもいだして書いてください。

というものだった。すると、Aさんはその日の識字の時間に用紙三枚を書き、まだ書けるからといって、それから五日間をかけて、机もない自分の部屋で、生活館の図書室で、自分の生いたちから始まり、おかあさんに対する不孝を詫び、泣きながら用紙二〇枚(原稿用紙にして約三〇枚)を書きあげたのである。いつも五〇音の文字を拾いながら勉強していたAさんのどこにこんなちからがあつた

のか信じられず、感動しつづけた五日間であった。Aさんの文章を、そのまま、すこし抜き書きしてみる。

おかあさん花がとてもすきなことおしっているの、きんじようにおてらがあり四月にわさくらの花みに。もう足がだいぶよわったので、おうやさんから、りやかおかりて花みにいつたらなみだおだしてよろこびました。今私になみだがでてきたので、ちょっとやすみます。五月十日 よる

でもいつも、はらうことばっかりありません。ふねのしごとでおそくなるといらいらして、あたるところがなくておふくろに。どなったり。しごとがなければ。ものにあたりたり。パチンコや。けえりんで、まけてかえると。たいたり。目の上おくろく。したこともあります。ほんとうに。ばちあたりでした。まだおもいだしたら。いろいろな。ことがあります。ほとけさまに。もう一どあやまります。おかあさん。かんべんして下さい。今からなんべん。あやまつても。もうおそいのです。が私しにとつて今は心でそおおもうばつかりです。

高等科一年の途中で学校へ行くのをや

め、兄のバクチの借金のため小僧奉公に出され、以後、刑務所づとめのこと、アフリカへ遠洋漁業に出かけたこと、長兄の死後、母親を養老院からひきとり、二人で神奈川県下を転々とし、伊勢原市での母親との借家住まいの日常生活、そして、母親の死のときなどが書かれていた。高等科一年まで学校に通ったといつても、教師に、そして、友だちに、がめつづけられ、とても勉強など手にかぬさんたたる学校生活をAさんは送り、そして、最後につきのように書いている。

こうして。むかしのことお。おもいだしている。いなかめまへに。うかんできます。まだまだ。おもいだせばきりがないのでこのへんでかんべんしてください。さいごに。自分でよんでびつくりしました。これだけのぶんしようおかいたのはうまれてはじめてでした。

何がAさんを、この文章を書くことにかりたてたのかは解らないが、とにかく今、おかあさんに謝っておかなければ、もうその時期はないという切羽詰まった想いが、文字をひきずりだし、言葉にし文章につなげていったのではないかと思う。また、ひんばんにうたれている句点

について言えば、Aさんは、読点のあることを知っているのにもかかわらず、しぼりだすようにしてだしてきた言葉と言葉をつなぐことばVとして句点をうっているように思われてならない。ぼくは、Aさんのうつ句点のひとつひとつにAさんがこの文章を書きつづけているときの心の奥底からのさけび声をきくような気がする。

そして、つぎの識字の時間にAさんは、みんなの前にたち、約三〇分かけて自分の書いた文章を、声をつまらせ全文読みあげた。そのすぐあとの感想にAさんは「私くしは今日この日がくるのおたのしみでした。それわ今まで心の中にしまっていたものをおもいきり。みなさんの前でなんとかよみおはったからです。むがむちゅうでした」と書いている。

今でもAさんがこの文章を書いたことが信じられないが、この文章を書いたことによつてAさんは、一歩前にすすみ、これからの自分の生きかたを視つめるきっかけをつかみえたのではないか、そして、文字をほんとうに自分のものとすることができたのではないかとぼくは思っている。

#### 四 識字の勉強をする

つい最近、寿の識字学校が、当初寺子

屋といっていたときからの参加者で、寿の識字学校を創りだし、約二年八カ月にわたって内からも外からも守りささえつづけてきたBさん(六七歳)とCさん(四二歳)につきのような題で文章を書いてもらった。

今、識字の勉強で文字をつかって、たくさんさんの文章を書いているのですが、識字をはじめ前の自分と、たくさんさんの文章を書いている現在の自分とをくらべて考えて、思っていることを、そのまま書いて下さい。

Bさんは、識字の勉強を始めるまで自分の名前を書くことができなかった人で、寿に約三四年ほど住みつづけている。この人の六七年間の生は、とりかえしがつかないことであるが、文字を識らなかつたがために歩かされた苦渋にみちたものであった。寿の夜間学校、識字学校に参加する三年程前までは、寿の街を歩くときも目深に帽子をかぶり、下を向いて生きつづけてきた人である。

今、私は右に書いてある、もんだいに、づばりおこたいできることは、私がCさんの部屋で勉強をはじめて、はや二年六月あまり、今日、私が文章が、ひとどう書ける、までになりまし

たことは、……？

私をはじめて識字の勉強をはじめ前の私のきもちと現在私のきもちのかはりよは、たしかに、あーあ勉強してよかったなーあと私はつうかんにをもっています。

こんごも、ますます識字の勉強に努力することを、ちかいます

文中の「……？」は、この間いちばん世話になっている人の名前を書くつもりであったが、ちょっと照れくさくなつて「……？」になつたのだと思う。また、後から話をきくと「ちかいます」などと書くつもりは全然なかつたのに自然に鉛筆が動いて書いてしまつたそうで、これで、ますます識字がやめられなくなつてしまつたと明るく笑つて話してくれた。Bさんがこの四月から、識字にきている人、みんなの突破口的存在で長い文章を書きはじめたことによつて、他の人もつられるようにして、識字にとつての大きな難関である文章を書くという作業に取りくんていったという事実がある。Bさんにとつても、まだまだこれから厳しい生きかたをせまられるのだと思うが、すくなくとも文字を識つたということによつて、その厳しさから逃げることなく

生きていくちからを自分のものとしつゝあるのではないだろうか。

Cさんは、福島県の山奥での開墾生活のため、学齢期になつても、あまりにも学校が遠すぎて、二日間しか学校に通うことができなかった人である。今、Cさんは、自分の四二年間の生きてきたことの想いを、自分のものとなつた文字をつかつて、その言文一致の長い文章のなかに刻みこみつづけている。

今私は字（が）けるようになってきた。しかしかけなかつたときは、なにもかも、まくらしてした、そのときは壁にむかつてにらめこしてしまつたなんとなく心がさみしくてしかだなかつた。しかしBさんと識字学校にいきたしたときわ。まいにち はらにきやいをいれでたたかつていたがたのしかつた、そんなしもながくわなかつた。しかしそんなのつみかさねて いるうちにしこしづづじぶんのものになるようになつた

少年の頃から親と離れて放浪生活を送り、やっと寿にたどりつき、そして、精力的に識字学校を創りだし、約二年八ヵ月にわたつて自分を励ましつづけてきたCさんの腹の底からの想いが、この文章

に象徴されているように思われてならぬ。掘りおこした土くれのなからでてきたようなこれらの言葉のつながりに、Cさんの四二年間の生きかたそのものが秘められているように思われる。文字の読み書きができなかつたときは「なにもかも、まくら」で「壁にむかつてにらめこして」いるようで「なんとなく心がさみしくてしかだなかつた」というCさんの言葉に胸がしめつけられるような気がする。

## 五——おわりに

日本の三大寄せ場のひとつといわれている寿町のドヤ街での識字という非常に困難な情況のなかではあるが、どうにかすこしずつ前にすすみえているような気がしている。識字の時間の最後には、一人ひとりとその日書いたものを発表しあっているのであるが何のためらいもないほどに自分の苦しい生育史、生活史を読みあげていくため、新しくきた人などは、もうそのつぎの識字の時間から、何の手助けをしなくても自分をふりかえり洗いなおす作業にはいつていってしまうことがある。

そして、この八月十四日からの寿まつりには、ぼくが四月から出し始めた

識字学校だより「ちからにする」(第一号から六二号まで)が識字にきている人たちによつて△売られる▽ことになっている。その学校だよりは、毎週、識字に出席した人の名前や勉強の様子やみんなの書いた文章をそのまま克明に載せているのであるが、それを自分たちの手で売ろうとしていることに心強いものを感じている。付け加えれば、貧しい識字学校の資金稼ぎをするのだともいっている。

寿の識字学校もいつどんなちからによつて崩壊してしまうかも知れないが、その危機感だけは常にもちつづけ、とにかく、行けるところまで行つてみようと思ふ。

そして、社会的にみるならば△繁栄▽の戦後教育のなかで、今日、なお文字の読み書きのできない人たちが、ぞくぞくとうみだされているという重い事実もおさえておかなければならない。

寿の識字学校が、さまざまな痛みをもつて寿にながれあつてつめてくる日雇労働者にとつての人間性のよみがえりの△場▽となればというささやかで、そして、果てしない希望をもちつづけるが、ぼく自身、識字学校で勉強していきたいと思つている。

△中区・寿識字学校▽